

## AOCR2025 参加記



図 1:AOCR 会場前の象。動くので一瞬本物かと思いました



図 2:開会式の様子



図 3:会場は満員。および IRIA-JRS ジョイントシンポジウムで講演する筆者

第 23 回アジア・オセアニア放射線学会 (AOCR2025)、第 77 回インド放射線学会 (Indian Radiological and Imaging Association: IRIA) がインドのチェンナイで開催されました。私は今回、IRIA-JRS (日本放射線学会) のジョイントシンポジウムで講演を行うため、この国際学会に出席しました。

チェンナイはインド南部のタミル・ナードゥ州の州都であり、長い歴史と豊かな文化を持つ都市です。訪問前にはインド第 4 の都市という情報から、熱気あふれる賑やかな街並みを想像していましたが、実際には想像以上に発展しており、古き伝統と近代的な要素が見事に調和した都市であると感じました。

関西空港からシンガポール航空を利用しました。シンガポール国際空港 (チャンギ空港) は広く快適で、乗り継ぎについても、セキュリティゾーン内で滞在していれば、搭乗ゲート直前に荷物検査を受けるだけなので非常に楽です。シンガポールからチェンナイは 3 時間半ほどで到着できました。チェンナイ空港は市内中心部に近く、本来であれば 15 分ほどで着きそうですが、交通渋滞がひどく 40 分ほどかかりました。

今回の学会会場となったチェンナイトレードセンターは非常に広く、整備されており、国際学会にふさわしい会場でした。また、会場の入口前では、民族衣装を纏った踊り子たちによる伝統的なダンスが披露され、まるでインドの文化そのものを体感しているような雰囲気になりました。さらに、驚いたのは本物と見紛うようなリアルな象 (AI 象???) が会場前にあり、多くの参加者を楽しませていたことです。インドらしいホスピタリティとエンターテインメントに感動しました (図 1)。

学会は非常に盛況で、多くの参加者が集まり、活発な議論が繰り広げられました (図 2, 3)。会場にはインド国内だけでなく、アジア・オセアニア地域全体から多くの専門家が

集い、国際色豊かな学术交流が行われました。私自身もジョイントシンポジウムで講演する機会をいただき、多くの刺激を受けました。(図3)

また、私はここ2年ほどで日本放射線学会(JRS)の国際交流委員としてウズベキスタン、マレーシア、ブラジル、オーストラリアなどへ出張の機会をいただき、今年から国際交流委員会アジア担当の役割をいただきました。今回の学会ではその際にお世話になった各国の先生方と再会することができました。インドについても昨年このIRIAに参加していたこともあり、幹部の先生方から“昨年ありがとう”などのお言葉を頂戴いたしました。この再会はこれまでに築いた機会が再び生き、非常に喜ばしく、光栄な時間でありました。

さらに、IRIAおよびAOSRのプレジデンシャルディナーにも参加しました(図4,5)。インドらしい華やかさを感じさせる色鮮やかなパフォーマンスやダンスが披露され、会場全体が活気に包まれました。このような社交の場では、異なる国や文化を背景とした参加者と親睦を深める貴重な機会となり、学術的な交流以上に温かい人間関係が築けたと感じています。

今回、観光をする機会は残念ながらなかったのですが、慶応義塾大学陣崎先生よりお誘いをいただき、近隣のRela Hospitalに病院訪問に行きました(図6)。400床ほどの病院ですが、大学など合わせて4つの施設が併設され2200人の学生が学んでいるということでした。病院見学のあと学長様との懇談の場もあり歓迎されました。実は前日プレジデンシャルディナーまでの空き時間に学会提供の観光に行く予定を立てていたのですが、約束の場所にバスが来ず、結局ホテルに戻る羽目になった私を陣崎先生が誘ってくださいました。私にとっては偶然のプランで、お誘いいただいた陣崎先生に感謝を申し上げます。

AOCR2025を通じて、インドの放射線医学の実力と発展ぶりに感銘を受けるとともに、アジア・オセアニア地域の医療連携の可能性を実感しました。AOCR、来年はシンガポール、再来年はウズベキスタンです。この経験を今後の活動に活かし、さらに国際的な交流を深めていきたいと考えています。



図4:AOCR プレジデンシャルディナー。プレジデントのメダルを次期会長に Handover するセレモニーを終え記念撮影する富山理事長



図5:AOCR プレジデンシャルディナーショー



図6:見学に伺った Rel hospital (病院ホームページより)